夜空に煌めく希望の星

LI校　高等部二年一組

武井　蓮乃

電光掲示板からはネオンのきらめきが四六時中眩しく、人々は昼夜も気にせず街を徘徊する。それが「眠らない街」ニューヨークだ。しかし、そこはかつての賑やかさと活気をなくし、今は「眠る街」と化してしまった。それは、今世界を脅かしている「新型コロナウィルス」という名の怪物が出現したせいである。

毎朝六時に起きて、軽い朝食を済ませた後、学校までの送迎バスに乗り、学校へ登校する。食堂に友達が集まっているので、会話に入り始業時間を待つ。チャイムが鳴ると、急ぎ足で教室へ向かい授業を受ける。お昼時間には数人の友人と昼食をとり、昨晩やり残した午後の授業の宿題を一気に図書館で終わらせる。午後の授業も終わり、部活でへとへとになり、家へと帰宅すると、おやつをつまみな

がら今日の分の宿題を始める。台所の方から、母が、

「晩御飯だよ。」

と呼ぶので、夕食をとりに行く。入浴をして、髪の毛を乾かし、ベッドへ入る。それが私のいわゆる「平凡な日常」だ。

そんな「平凡な日常」が私は大嫌いだった。毎日に刺激がなく、ロボットのように決まった時間に同じ作業を繰り返すだけ。周りの友人達もそんな日常に飽き飽きし、学校へ行くと夏なのに、

「明日、吹雪が来て、学校なんかお休みになればいいのに。」

と笑いながら、冗談交じりに喋ったりもした。昨年末、そんな私たちの「平凡な日常」を脅かすものが現れた。新型コロナウィルスだ。

現在、「新型コロナウィルス」という言葉を聞かない日がないくらい、社会は新型コロナに浸食されてしまっている。外に出かけるとしても、細心の注意を常に払い、一刻の油断

も許されない状況である。中国の武漢で感染者が出て以降、感染者と死亡者数が増加の一方だった。勢いが加速していく中、世界にもその報道が大きく取り上げられ始め、国を超えて感染者が相次ぎ、アメリカにもとうとうその時がやって来た。米国で感染者が確認されたのは一月末だった。三月十三日、トランプ大統領が国家緊急事態を宣言した。その二か月弱の間、感染者数は大幅に増え、重篤者や死者も毎日増加している状況だった。正直、アメリカ政府の新型コロナ対策は始めるのが遅かったと思う。他の国が続々とコロナで侵されているというのに、いくら準備期間が短かったとは言え、出来ることはたくさんあったと思う。マスクの輸入や積極的な自粛の呼びかけ、事の重大さを民衆に認識してもらう等、施策は山ほどあったはずなのに、気付けば米国は世界で最も感染者が多い国となってしまっていた。

コロナウィルスは確かに感染拡大が速く、

亡くなってしまう人が多発している。しかし、一番恐ろしいのは、私たちが「新型コロナウィルス」により心が蝕まれていくことだ。コロナウィルスは人々の心に恐怖心を植え付け、それをメディアが強調し、育ててしまう。その悪循環のせいで、様々な人たちが間違っている正義感を振るう人たちの標的となってしまっている。

三月の初旬、まだ殆どの人がマスクをしない中、ウィルス対策として私はマスクをして、いつものように補習校から電車で帰っている時だった。

「中国人め、早く国へ帰れよ。」

「お前のせいで何万人の罪のない人たちが死んだんだぞ。」

「全世界の人々に謝れ。」

私と同い年位の子たちが突然、心無い暴言を吐き捨てた。見ず知らずの他人に罵声を浴びせられたのが初めてだったので、私は驚き立ち尽くしてしまった。その後の道中も、私が

「アジア人」だから、電車の中ではあからさまに避けられ、嫌な目で見られた。私の友達も「中国人」だから、罵声を浴びせられ、ヘイトスピーチを受けた。私は「コロナウィルスの猛威」よりも「コロナウィルスによる差別行為」のほうが怖くなった。いつコロナウィルスが収束するかもわからない不安な気持ち、大切な人がいなくなってしまうかもしれないという恐怖、私たちの「平凡な日常」を奪ったことへの怒り等、様々な気持ちが入り混じり、このような差別が起こってしまうのではないだろうか。

無知や不安を背景に起きる差別は、決して許されるものではないが、私は誰かを攻めるつもりはない。最初に新型コロナウィルスが確認された中国も、私に罵声を浴びせたあの子たちも。誰かを攻めることで自分の心は楽になるかもしれないが、何の解決にもならない。誰かを攻めるのではなく、真っ暗な夜空にも無数の星が綺麗に煌めいているように、

私たちもこの状況の中で大切な何かを見つけられるように目を向ければいいのだと思う。

例えば、私が以前は飽き飽きしていた「平凡な日常」の大切さだ。私たちは普通の日常に馴れてしまっているせいで、物事のありがたみが分からない場合も多い。普通に学校へ通える幸せ、毎日三食食べられる幸せ、友達や家族の大切さ。この自粛期間に嫌というほどそれらの尊さを思い知らされた。この世の中では私たちが「あたりまえ」と思っているようなことが出来ない人たちも多い。この数か月の間、私は自身を見つめ直し、自分がどれほど恵まれているか改めて気付かされた。

また、学校生活では、パンデミックがあったが故に仲間との絆が更に深まった場面もあった。新型コロナウィルスの影響で、学校では楽しみにしていた行事が中止や延期になり、卒業式や入学式はまともに執り行われない状況だ。補習校も例外ではない。高等部二年となり、補習校での最後の一年なのに、運

動会や秋祭り、中高等部恒例のボーリング大会が中止や延期となった。毎週土曜日十四年間頑張り続けたのに、最後の一年で行事が殆どないとなれば、悔しくてやりきれない気持ちでいっぱいになった。一方、パンデミックで学校生活全てがオンラインとなる中、オンラインで良かったことは生徒会活動だ。今年度、「生徒会長」という大役をこの大変異例な事態の中担うのは不安だったが、オンラインだからこそ出来ることがたくさんあり、充実した取り組みとなっている。通常だと十五分の生徒会会議だが、オンラインだと授業が終わった放課後に行われるので、三十分ほど議題について話し合っている。運動会が中止になったため、いつもは忙しくて出来ないアイスブレーカーやゲーム大会を実施し、お互いのコミュニケーション能力やチームワークスキルを育成することにも力を入れている。オンラインでも出来ることを考え、今年、初の試みで生徒会公式インスタグラムの立ち上げ

や、日本の芸能人を招いて講演会を行うことなどをした。オンラインだったからこそ出来たことだと私は思う。

今回のパンデミックは様々な気付きを私に与えてくれた。どんなに先が見えずに不安な状況下でも、取り組めることは幾らでもあること。そして、「平凡な日常」の中で見失っていた大切なものに気付き、感謝する機会を得られたこと。これらは全てコロナの恩恵とも言える。この様な状況下、いかに自分を良い方向に変え、そして周りに良い影響を与えられるかが重要だと私はこの自粛中に学んだ。

カタカナの「コ」「ロ」「ナ」を融合すると「君」という漢字になる。物理的に離れていても、一人一人、皆が心を一つにしてこの「コロナウィルス」という怪物に立ち向かえば怖くない。自粛期間は一日が一年に感じるように長く、一人でいる孤独感、自分や家族、知り合いがいつ感染してもおかしくなく、大切な人を失うかもしれないという恐怖等、様々

な感情が私たちを取り巻いている。けれど、そんな負の感情の渦に飲み込まれることなく、この様な状況下でも希望を見いだし、楽しく過ごせるよう少しの工夫を加えればいい。一分一秒でも早く自粛が解除され、「平凡な日常」を取り戻したい。それには、一致団結し、マスクの着用や不要不急の外出を控え、自分の出来る範囲のことをすることが必要だ。これは、「自分」はもちろん、「君」を思うからこそ取り組むべきことだと私は思う。

新型コロナビフォー&アフター

LI校　高等部一年一組
山口 浩

二〇二〇年は、新型コロナという怪物によって世界が、そして僕が大きく変わったターニングポイントの年になった。この怪物は、多くの悲劇を生み出したけれども、また多くのことを教えてくれた。すべては予想通りにはいかないことと、世界がどんなに変わっても自分はその状況を冷静に判断し、適応し、行動することの大切さである。

経験したことのない新型ウイルスの強力な感染力は世界にカオスを生み出した。各国のリーダーは、経済と感染抑止との板挟みで苦しんだと思う。しかし、リーダーの本性が隠しようもなくあぶりだされた。僕は、各国のリーダーがどういう態度でこの予期したことのない危機に臨んだか、ニュースを興味を持って見ていた。国それぞれの国民性や経済の状況が違うので、どれが正しいとは言えない

が、どのような態度で立ち向かったかは、今の結果につながっているように思える。良い例が台湾だ。台湾は、コロナを封じ込めた唯一の国である。まず、いち早くこのウイルスの恐ろしさに気づき、すぐに国を閉鎖した。マスクも国民に確実に行きわたるようＩＴを活用して早く渡していた。その「スピード感」「正しく警戒すること」「医療機関と政治、国民の信頼関係」がうまく機能した。

アメリカは、州ごとに対応が白黒分かれていた。大統領は、科学的なデーターをほとんど信じず、「コロナはただの風邪」と言い続けて数か月マスクをしなかった。ニューヨークは四月と五月に死者が毎日七〇〇人を超える地獄をみた。セントラルパークの、まるで野戦病院のような白いテントだらけの写真を見たときは、僕は目を疑った。この時から、州知事はデーターを用いて毎日真剣にニューヨーカーに語りかけ、検査の数も大幅に増やして、七月にはほぼ唯一感染拡大を減少させた

州となった。

フロリダ州や中西部、南部ではマスクに抵抗する運動が起き、多くのアメリカ人は、上から強制されることが死ぬほど嫌なんだということが肌で分かった。新型コロナと同時に起きたのは、警察によるフロイド氏の暴行死事件だった。フロイド氏の最後の言葉、「息ができない」というのは、文字通りコロナの時代に象徴するキーワードとなった。マスクですら、まるで自由を奪われると感じ、「アンチマスク派」など政治的な問題に発展してしまった。コロナのフラストレーションが、ブラックライブズマター（ＢＭＬ）に火をつけた。何とか状況を打開しようとして、もがき苦しんでいる人々の気持ちに、潜在的な不満が重なり、大きな人種差別問題への抵抗運動が起きた。僕は政治にそんなに影響されないタイプだけれど、この半年は、アメリカの自由の価値観、人種差別問題、リーダーシップのなさ、州ごとの違いなどが浮き彫りになったよ

うに思う。

僕自身は、急に学校に登校できなくなったり、クラブ活動やボランティアができなくなったりした状況を仕方がないと思ったけれど、時には無性に悲しくなることもあった。ロボティクスチームの大会に行くつもりで、一年かけてボールを投げたり、ロープを登ったりするロボットの開発準備をしていた。まさか大会が中止になる展開は予想もしていなかった。

僕は、高校生ボランティアクラブであるキークラブでコミッティボードのメンバーもやっており、授賞式は泊りがけで行く遠征があったが、それも三月に中止になってしまった。その時は、執行部の会計係として選ばれてすぐだったので、色々計画していたことができなくなってしまってがっかりした。すべてオンラインになる生活では、ファンドレージングなどの活動ができず、クラブも活動できるかどうかも分からなくなってしまった。普段、

このボランティアクラブは、乳がんや白血病をサポートする行進などのイベントに参加して、集めたお金を寄付している。他には、レストランと組んで食べ物を買うと一定の割合でお金がもらえるので、ＮＰＯの会社を通してアフリカの貧しい子ども達に井戸を提供する活動もしていた。

人と会ったり人のために何かするという社会的な欲求をウイルスに否定された気がした。正直言うと、三月に学校が休みになったときは、すぐに自しゅくが解除されると思っていたので、休めて嬉しかった。しかし、「これはかなりまずい」という気持ちになったのは、それから二週間たった四月上旬だった。予定されていたキークラブのイベントでフラッシングの店に行ったとき、なぜか、人の気配がなく僕一人だった。十五分くらいたっておかしいと思って友達に連絡したら、すべてイベントは中止になったということだった。帰りのバスに乗っている時、デブラシオ市長

が「すべての学校は、六月末までクローズする」と発表したのだった。その時の絶望した気持ちは今でもはっきり覚えている。「このままでは、何もできなくなる」と。

それでも僕はこの六か月間、ただ落ち込んでいたわけではなかった。まず、夏にやれることを何か見つけようとした。そして新しい経験をした。仕事を見つけるのは簡単ではなかったけど、ＳＹＥＰというＮＹ市の若者向けのキャリアプログラムに応募して、運よく入ることができた。興味のなかったコーディングだったが、勉強すると奥が深い。毎日プロジェクトのビデオ作りやオンラインでプレゼンテーションをした。毎日五時間の講習を受けて、プロジェクトに参加し、報酬がもらえ小遣いを稼いだ。報酬以上に価値があるのは新しい経験だった。

もともと趣味だったギターやベース、ドラムは、毎日三時間くらい夢中で練習し、好きな音楽のジャンルも広がり、練習で技術も向

上したと思う。バンド仲間の友達とマスクをして地下室で録画した。カメラワークや接続、音のミキシングも習って、ユーチューブにもアップした。仕上がったときは、夏を意外と充実して過ごせたな、と達成感があった。

最近は、知り合い四人から頼まれて日本語を教え始めた。普段、普通にしゃべったり読んだりして意識していないで使っている日本語も、教える側に立場が変わると、意外と難しいことが分かった。特に生徒のレベルの差があるので、どうやって教えるのかチャレンジだ。全く日本語を知らない人にどうやって言葉を教えるか、悩みながらプランをたてている。

振り返るとコロナで生活は変わってしまったが、その中で新しいことに挑戦してきた。社会のできごとをうのみにしたり、流されたりせず、冷静に判断してきたつもりだ。できなくなったことにフォーカスするより、できることに気持ちを切り替えてきた。そのこと

は、僕を強くしたと思う。もしかするとコロナが僕を変えたのではなく、僕は自分で意識して変わってきたのかもしれない。これから世界はどうなるのか、学校や生活はどうなるのかは、わからない。その時々に応じて自分の道は自分で切り開いていきたいと思っている。

コロナ禍の宿題

LI校　中等部三年一組
延原　伶

「NYC Public Schools Closed Through At Least April 20」と、テレビでニュース速報が出ました。
「やったぁ！明日からやっと学校が休みになる！」
日本では即に休校になっていたので、とても羨ましく思っていました。
ところが、最初は一ヶ月程の自粛生活の始まりだと軽く考えていましたが、ニューヨークはすごい勢いでコロナウイルスにのみ込まれ、感染者が増えていきました。そして医療崩壊が起こり、多くの人の命を奪っていきました。ニュースを見る度に、世の中はどうなってしまうのだろうと不安に思い、実際に起きている出来事は現実ではなく、映画でもみているかの様に思えていました。今まで普通にしていた通学や、家族で行くレストランや

買い物など、沢山の事が本当に出来なくなってしまいました。

　このウイルスを初めてニュースで見た頃には「早く学校が休みになって欲しい」と思っていた事がとても浅はかな考えだった事に気が付きました。これまで当たり前にしてきた事が全く出来なくなってしまい、当然と思っていた生活が無くなってしまったのです。考えてみると、今までの世の中は凄く贅沢だったのかも知れません。例えば、家族で毎日「おはよう」と言ったり、テレビを見てたわいもない話をしたり、一緒に食事をしたり、時には言い争いをしたり。学校や課外活動で人と接しながら色々な事を学び、大変な事も沢山あるけれど自分の夢に向かって頑張る事ができたり、学校帰りに友達とおしゃべりしたり、美味しいスイーツを食べに行ったりしていた事など、実はとても贅沢な時間でかけがえのない時を過ごしていたのだと気付きました。全ての事はずっとあるものではなく、本当は

一つ一つありがたく感謝しなくてはならない事で溢れているのだと思うようになりました。

でも、もしこの自粛生活がなければ、こんな事に気付きもせずに、これからも当たり前に生活していたのかも知れません。こんな大切な事に気付く事ができたおかげで、逆に幸せが増えたようにも思いました。

ただ、こんな時にこそ他人に対しての気遣いができる社会であってほしいとも思ってしまいました。残念な事に、世界では驚くような事が多く起こっていました。コロナが流行し始めた頃、除菌グッズやトイレットペーパーを買い占めている人や、時には奪い合いの喧嘩をする人まで出てきました。ウイルスに感染して亡くなってしまうかもしれないリスクを負いながらも、命を救う為に闘っている医療従事者やその家族に対しての偏見や差別もありました。コロナウイルスで亡くなった人がいる家族は、周りの目を気にして亡くな

った事すら話せない状況でした。
　今の世の中は沢山の情報で溢れかえっています。だけど、それが本当に正しいのか見分ける力が必要だと思います。そして、この様な時だからこそ自分の事だけではなく、今、何をすればいいのかよく考えて行動し、人を思いやる気持ちを持つ事が大切だと思います。私にはワクチンを発明する事も病気を治す事もできませんが、こんな私にも出来る事があります。それは人との距離を保つ事、手洗いうがいをしっかりする事、そして、もし体調が悪くなったら家にいる事などです。これが私にできる優しさの一つだと思います。
　本当に今の状況がいつまで続くのか分かりませんが、皆で協力し合える世界になればいいと思います。今、世界中の国や人が試されています。おそらく「世界が初めて経験する困難をどう生き抜くのか、」それこそが私の将来を大きく変える『コロナ禍の宿題』なのです。

現代社会におけるインターネットの重要性

LI校　中等部二年一組

上村　百合愛

今年は、コロナウイルスの感染が世界中に広がったため、私たちの生活が大きく変わりました。イベントの中止や会社の倒産、学校の閉鎖など私達の周りで様々な影響を受けました。そんな状況の中、私達の生活を支えてくれたのは、インターネットでした。毎日仕事に出ていた両親は、家で仕事をするようになり、学校に通っていた私達は、オンライン授業を受けるようになりました。それだけではなく、友達とはソーシャルメディアを通して会話をするようになり、中止になったイベントはオンラインで行われました。また、習い事もオンラインでレッスンを受けるようになりました。これらの生活の変化を詳しく説明したいと思います。

今年の三月、ニューヨークにコロナウイルスの感染者が増えたため、学校が閉鎖し、オ

ンラインで授業を受けるようになりました。授業はズームやグーグルクラスルームを使って一日の課題を提出したり、クラスメイトと一緒にレポートを作成したりしました。最初は戸惑いましたが、少しずつ慣れていきました。

友達とは直接学校では会えなくなってしまいましたが、インスタグラム、スナップチャット、フェイスブック、ツイッター、ラインなどのソーシャルメディアを利用して、チャットをすることができました。自宅待機期間中は小学校の時の友達グループ内で何でも話し合うことができました。友達に会えないのは寂しかったですが、インターネットのおかげで顔が見れたり、会話ができたのは嬉しかったです。

私が所属しているよさこいチームは、ズームを使ってリハーサルやパフォーマンスを家の中でするようになりました。世界十八か国の踊り子さんたちと一緒に合同リハーサルを

行って、一つのよさこいの作品を完成させました。その作品で使われているミュージックビデオにも出演することができました。日本で開催されたオンラインよさこい祭りにも参加しました。その祭りの後、私が所属しているチームは日本のテレビ番組で紹介されていたと、日本にいる母の友達に聞きました。そのことを聞いた両親は、とても驚いていました。コロナウイルスが世界中に広がる前は、リハーサルやパフォーマンはそれぞれの場所で行っていて、オンラインで行うとは考えもしなかったです。実際にオンラインでやってみて、世界中の人たちと繋がった事が良い経験になりました。

夏休みはサマーキャンプが中止になったため、家にこもってばかりでした。そこで母は私と妹のために、オンラインで受けられるダンスレッスンや、ボーカルレッスンを差が探してくれました。そのおかげで私達は夏休みの間、レッスンを家で儲け続けることができ

ました。オンラインレッスンの良いところは、通えない距離にあるスクールのレッスンを受けられることです。私はロサンゼルスのダンススクールのレッスンを受けました。ボーカルレッスンの音楽学校はニューヨークにありますが、サンフランシスコから受けている生徒もいました。オンラインレッスンの欠点は、インターネットの接続が悪いと、画像や音声が乱れたり、時間のずれが生じたり、スピーカーを通して聞こえてくる声が実際の声とは異なる場合もあります。実際に通えれば良いのですが、コロナウイルスがまだ終息していないので、家でオンラインレッスンが受けられて良かったです。オンラインで受けたおかげで新しい友達もできました。実際に会ったことはないのですが、これも面白い経験です。

八月の初めに、ニューヨークに台風が上陸して、私の家のインターネットが一週間使えなくなりました。両親は自宅勤務をしていたので、仕事のパソコンを持って親戚の家にあ

るＷｉＦｉを借りに行きました。私と妹もボーカルレッスンを親戚の家で行けました。その時、現在の私達の生活の中でインターネットは必要不可欠だとじっかんしました。テレビが見られなくなったり、友達と連絡が取れなくなったり、インターネットを使うものは全て使えなくなってしまいました。

インターネットはとても便利ですが、それに頼りすぎると、無くなった時に何もできなくなってしまいます。これからの私たちの生活ではインターネットがあっても無くても、変わらない生活が出来るように、多様な状況に合わせて私達自身が変わる必要があると思います。これからは、オンラインだけでなく、オフラインでも安心して生活できる世の中になってほしいです。

「隔離」に学ぶ

W校　中等部二年一組
押川　正太郎

「新型ウイルス？それ美味しいの？」正直な所、それが私のコロナウイルスへの最初の印象である。特に危険なものだとは感じていなかった。

「中国が発生地だからアジアに広がるのかな。日本にも広がっちゃうのかな。親戚の人はみんな無事だといいけど。まあアメリカには広がらないでしょ。遠いんだし。」私の考えはこんなものだった。甘いのである。なめていたのである。放射能じゃあるまいし、距離があれば安全というのはグローバル化した社会では通じないのだ。

私のシュークリームより甘い考えをよそに、新型コロナウイルスはアメリカ合衆国で怒涛の進撃を開始していた。一、二月ごろからポツポツとアメリカ国内でも感染者が出始め、友達との会話などでもコロナウイルスに

ついての話が出ることは多くなっていた。この時点で私は「学校は大丈夫なのか」とぼんやりと考えていた。不思議な話だが、私は学校には閉まって欲しくはなかった。学校とは、私の平和な日常のシンボルだからだ。コロナウイルスは私のささやかな心配、そして願いを完全に無視した。三月初め、私の住む場所から近いニューヨーク市で感染者が見つかった。数日後、私の通っている学校は二週間学校を閉め、インターネットを使う学び方に変更。「Quarantine」の生活が始まったのである。

「Quarantine」は日本語で「隔離」という意味らしい。これはあまりピンとこない。散歩にも行くし、友達と連絡を取っていた。友達と顔をあわせることができなかったのはこたえたが、別にそれほど不便ではなかった。家の中では大学に行った姉が帰ってきており、むしろいつもより賑やかだった。全く「隔離」という感じではなかったのだ。

学校のことを家でやるのは大変だった。学

校には独特の雰囲気がある。学校は勉強する場所だ。そこに違和感はない。しかしそれを家でやるとなると話は別だ。勉強が大好きではない私にとって、家は学校からの砦だ。もちろん、宿題はする。テスト勉強だってするし、レポートだって書く。しかし家に先生はいない。家で授業は受けない。家でテストそのものを受けることはないし、家にあの嫌いなクラスメイトはいない。別にインターネットの授業になったからといって先生やクラスメイトが家に来るわけではない。

ただし精神的には話が違ってくる。あの先生の講義のビデオを家で見るということは家にあの先生がいることになる。家であのクラスの課題をやるのは、あの教室のあの机に座っていることになる。つまり、逃げ場がなくなったように感じた。学校からの逃げ場が。

コンピューターを使った授業でも苦労した。数時間画面上に釘付けになるので、目がとても疲れた。また元来画面上で読書などを

するのが苦手な私は、課題などをするのに手間取った。

それでも、普通よりやらなくてはいけない勉強の量は減った。余った時間ができたのだ。時々、私はこの時間に一体何をしていたんだろう、と考える。何をすべきだろうか。ランニング？勉強？何か新しい趣味？自由研究？そうかもしれない。無論、どれもやっていない。たわいないことをして過ごした。古い本を読み返したり、新しい本を読んだり、折り紙を折ったり、腹話術を試してみたり、縄跳びをしたり、などなど。もっと「有意義」なことをすべきだったかもしれないが、私は自分の時間の過ごし方にそれなりに満足している。何か一つ新しいことができる、というわけではなかったが、自分がどういう人か、と知ることができた。

世界ではコロナウイルスの影響が広く及んでいた。私の住むウェストチェスター郡も一時ニューヨーク市より感染者が多く、私たち

はことの重大さを改めて認識せざるを得なかった。これはおそらく私の生きてきた中で最大の事件だった。何しろ世界規模の事件だ。私の周りの大人もおそらく怖がっていたと思う。目に見えないものへの恐怖があったのだろう。しかし人間というのは不思議な生き物で、慣れたらまた普通の生活を始めるのだ。

六月ごろからジョージ・フロイド氏が警察に殺されたことに対するデモが全国で起こった。コロナウイルスが猛威を振るっている中でこんな大規模なデモが起こることが新鮮だった。まるで普通の時みたいで、周りの人が変わっていないことを知って安心した。

今私に一番影響を及ぼしているのは病気ではなく生活習慣の変化だ。だから私は「コロナウイルス」と聞いて「隔離生活」を思い浮かべる。私は今年、「コロナウイルス」からいろいろなことを学ぶことができた。九月から再び少しずつ学校が始まるが、今回学んだことをいかして生きていきたい。

新型コロナウイルス

W校　中等部一年二組
阿知波　颯

あれは忘れもしない僕の誕生日三月十日のことだ。学校がいきなり休校になった。それは僕の住む街で新型コロナウイルスに感染した可能性の人が出たからだ。僕は自らの誕生日を学校で過ごす事ができると思っていたので、とても残念な気持ちになった。それと同時に今まで新型コロナウイルスは遠い他の国での事だと思っていたので、自分の身近な所に迫ってきたことにとても恐くなった。結局、その後学校は閉鎖され、僕は今に至るまで学校へは戻ることはなかった。

世の中は完全に外出自粛になり、僕の家族も母以外は何ヶ月も外出しなかった。僕は友達と最初気軽に会えないことや、今まで当たり前に毎週やっていたサッカーやバスケットボールの試合が出来ないことがとても腹立しかった。けれど新型コロナウイルスの感染拡

大を防ぐため、全ての人がやらなくてはいけないことだし、正直僕も外出して多くの人の中に行くのが怖かった。だから、外出できなくてもなるべくこの状況をプラスに受け止めて、前向きに過ごすように気持ちを切り替えた。

その一方で、良いこともたくさんあった。今までは週末にしか共に時間を過ごす事がなかった父と毎日三食一緒に食べる事ができ、僕はとても嬉しかった。家族四人で毎食たわいもない話をしながら食べるのが、僕はとても好きだ。また普段は学校と補習校の宿題、サッカー、バスケットの練習に追われた毎日だったので、ゆっくりと本を読んだり、ゲームをする時間ができ、ある意味僕の中では、とても充実した日々を過ごすことができている。

そして一番のこの自粛生活の中での出来事は子犬を飼ったことだ。僕がずっと心の中で温めいた思いが実現した。名前はルーニーと

名付けた。ルーニーといると家族みんなとても癒されている。

まだ新型コロナウイルスは収まっていないけれど、九月からは学校は再開する。週二日だけの登校だ。マスクをしながら授業を受けるのは今までと違うけれど、友達と過ごせるのはとても楽しみだ。不安もあるけれど、ワクチンがない今は全ての人がルールを守りモラルを持って生活していくとこが重要だ。早く元の生活に戻れるよう心から願っている。

長者小学校のみなさんへ

L工校　初等部　六年一組

クラーク将人

暑中お見舞申し上げます。長者小学校六年生のみなさん、お元気ですか。八戸はもう暑いですが。みなさんは、今もまだ藤子公園に集まって、みんなでいろんな遊びを楽しんでいますか。ニューヨークでは、ついこの前、ハリケーンが上陸し、木がたくさんたおれ、多くの家で停電が起こりました。コロナウイルスのために、出かける時にはマスクをつけたりして、気をつけていますが、ぼくも家族も健康に過ごしています。

今年は、コロナウイルスが広まってしまったせいで、ぼくが毎年楽しみにしていた日本への帰国をあきらめなければいけませんでした。今年の夏は八戸に帰れないと知った時、夏が台無しになったような気がしました。今年は小学校最後の体験入学になるはずの年だったので、一年間すごく楽しみに待っていま

20×20

した。

ぼくは長者小学校に行けなくて悲しい理由がいっぱいあります。ぼくがまたやりたかったことは、ざりがにの水そうを洗ったり、すもう大会でみんなのことを応援したり、給食の後に、友達とおぼんを洗ってかわがしたりする事です。一番したかったことは、友達みんなと会って遊ぶことです。ぼくが初めて体験入学した五年前からずっと長者小学校のみなさんは、ぼくにやさしくしてくれました。一年に一回、学校で一週間だけですが、この一週間の一日一日は、ぼくにとってすごく大切です。コロナウイルスがなかったら、ぼくはきっと今年もまた、朝の会の前に校庭をみんなと競争しながら走ったり、みんなといっしょにぶるぶるしながらしゃっこい〜つめたい〜プールの前のこし洗いに入ったりしていた事でしょう。

ぼくの母と山美先生がイーメールで相談して、二学期が始まったら、オンラインで話す

時間を作ってもらえる事になったそうです。ぼくはこれを聞いて、すごくうれしくなりました。今年は、みなさんと会うことはできないけれど、オンラインでみなさんの顔を見て、いっしょに話せることは、長者小学校に行きたかったぼくにとってとてもありがたいです。山美先生、ぼくにこんな機会を下さって本当にありがとうございました。オンラインミーティングのリンクがとどくのを楽しみに待っています。

長者小学校六年生のみなさん、コロナウイルスに負けず、元気に過ごして下さい。マスクと手洗いを忘れないでね。次に会える時には中学生ですが、またみんなと楽しく勉強したり、遊んだり出来るといいですね。その日が来るまで、みんなは八戸で、ぼくはニューヨークで、おたがいがんばりましょう。

20×20

灯台下暗し

w校　初等部六年一組　村上　慧

いつもの夏なら、夏休みに入ると飛行機ですぐに日本へ向かい、いとこや祖父母と楽しい時間を過ごすはずだった。

いつもの夏なら、家族から離れて、コネチカットのサマーキャンプに行き、二段ベッドで友達と夜を過ごし、一緒にカヌーに乗ったり、キャンプファイヤーを楽しみ、プールに入り浸るはずだった。

私は中学校に入り、フランス語の勉強を始めた。だから、今年の夏は、ずっと行きたかったフランスに二週間程旅行に行くはずだった。

そう、今年の夏は、計画通りに行けば遠くに住む友達や家族と一緒の飛行機に乗って、いろんな大陸に足を延ばし世界中を旅するはずだった。

しかし、全ての「はずだった」夏は、やっ

てこなかった。その代わりに、思いがけない夏がわたしに訪れた。

いつもの夏の間は、なかなか会えない親友カタリーナと地元の湖に行き、カヤックとパドルボートをした。足にからみつく魚をとり、岸辺で他愛もない話をえんえんと語り合った。

いつもなら一緒に行くことなど考えもしなかったお母さんの仕事について行き、お母さんのお客さんステファニーから乗馬の訓練を受けさせてもらった。そして、そのお礼に、私がお仕事を手伝った。

いつもなら夏の間は会えないアメリカのおばあちゃんと五週間もの間一緒に暮らし、新しいお料理やゲームのやり方を教わった。そして、私も得意料理、クッキーの作り方を教えた。

いつもは通り過ぎる、近くのアイスクリーム屋さんにわざわざ出かけて行き、両親とどのアイスがいいのか言い合いながら味比べを

した。私は意外とフルーツのアイスクリームが好きだったことに気づいた。

いつも遊んでいる近所の友達と近くの街、ミスティックに旅行に行った。私たちの住むニューヨークからたった二時間で、まるでヨーロッパに来たかのようなかわいらしいお店が並んでいた。友達と行った先々の観光地でビデオを撮って、動画を編集することを覚えた。

いつも夏は家ではほとんどすごさなかったのに、今年はバーベキューと裏庭で家庭菜園をするので、毎日のように外に出て家の隅々を見て回るようになった。今まで咲いていることにすら気に留めなかった花を切って、フラワーアレンジメントをしてみた。家の中がパッと明るくなり、今まではこんなに花がきれいなものとは気づかなかった。

きっと普通の夏ならば、両親二人だけが観に行って私は留守番であっただろうブロードウェイ劇場の「ハミルトン」。劇場が開いて

いないので自宅のテレビで配信されることになった。観たいとも思っていなかったが、母がどうしても一緒に観たいというので仕方なく座って観ていた。登場人物、ハミルトンの奥さんエライザが「周りを見てごらん、今生きていることがいかに幸せなことか」と歌った。

コロナが私の夏を変えた。いや、世界中のほとんどの人の生活を変えた。「できるはずだった」ことができなくなった。

その代わり「周りをよーく見てみた」ら、そこにあることに気づかなかった「当たり前」が幸せを運んでくれていた。

遠く遠くを見て生活していた私。足元でもたくさんの学び、喜びがあったことに気づかされた。健康に家族や友達と過ごせる今は

「いかに幸せなことか」

灯台下暗し。コロナは私の足元を照らしてくれた気がした。

できることに目を向けよう。できないこと

に打ちひしがれている場合ではない。

灯台下暗し。胸に刻もう。

私とコロナ

W校　初等部　六年二組
森島　凛

コロナウイルスは、最初中国から、韓国、日本、ヨーロッパと広まり、そして私が住んでいるアメリカでは、世界で最もタクさんの死者、感染者がでた。

初めのころ、アメリカには広まっていなかったので、正直自分には関係がないと思っていた。

現地校が休校となってからも、いったい何が起きているのかわからなかった。

レゲレオンライン授業が始まり、アメリカでもコロナ感染がどんどん広まっていき、世界中、そして私の日々も大変になっていくことがわかってきた。

学校が休校になる前日を今思い返すと、先生たちがいつも以上に、持って帰るものに関して、細かく指示をだしていた。私は、なぜだかわからなかったが、先生の指示にしたが、

た。そのあと、私は父から、

「先生たちがこれから忙しくなるから学校が休みになったのだ」。

と聞かされ喜んでいたが、こんなに長く休みになるとは思ってもいなかった。その日から、私は毎日が大変なことになるとは予想もせずに、学校の帰り道を父と一緒に歩いていた。

休校から二週間くらいたったころから、オンライン授業が始まった。最初は先生からもらった宿題を終わらせる、という毎日だった。その後、私の学校は、グーグルミートというアプリを使って少しずつ実際に会話をする、普段と近い授業がスタートした。

オンライン授業が始まると同時に、宿題も増え、徐々に私にとっては毎日の課題をこなすことが難しくなってきた。父の仕事が終わった夜に、課題を手伝ってもらい、宿題を終わらせる毎日だった。大変な日々だったが、オンライン授業があり、英語を使うことで英語

をキープできるから先生たちには感謝している。

オンライン授業は難しかったが、楽しい部分もあった。例えばクラスメイトたちが、家で何をしているかを聞くことができたり、ライティングの授業では一人一文ずつ考え、お話を作ったりしてとても楽しい時間を過ごした。

印象的だったのは、学年最後の授業で、学年全員の先生たちが、私のグーグルミートの画面に会いにきてくれたことと、担任の先生の目が少し涙でうるんでいるように見えたことだ。私もこんな形で、このクラスが終わりだなと思うと、最後の三か月、オンラインだったことが少し悲しかった。

また、他のクラスメイトと違い、私たちは五月に、父の仕事の転勤で、ブラジルへ引っ越す予定だった。しかし、コロナによって引っ越しは延期になった。四月から、ブラジルで仕事をする予定だった父は家で仕事をするこ

とになり、アメリカからブラジルの仕事をするため、毎日会議がたくさんあり、とても大変そうだった。

そんな中、私には二つの気持ちがある。

一つ目は、引っ越しが延期になったことで、もし九月に学校が再開すれば、学校に行って、友達と会えるかもしれないと思うと、少し楽しみだ。

二つ目は、ブラジルに行けば、また新しい世界をみることができ、新しい出会いがある。父の話を聞いていると、ブラジルでの生活にも興味があるのでしばらく行けないのは残念だ。

コロナがなくなるのはいつになるかは、誰にも予測がつかない。ブラジルへの引っ越しは、いつになるかは分からないが、悔いのないようアメリカでの生活、一日一日を大切に、満喫したいと思う。

私は人生でこんな大変な日々を初めて経験した。たとえ、コロナが終わったとしても、

元の生活に戻ることはできないと思う。でもこの生活で改めて思った、家族や友達の大切さ、健康に生活することの大切さ。だから、悔いのない生活は、どういうことなのかを自分でしっかりと考え、大変ながらも笑顔で元気で過ごせるような毎日にしたい。自分で毎日の計画を立て、それを毎日クリアすることが、私の悔いのない生活だと思う。この作文コンクールの課題も計画通りにできたかどうかは、改めて父と母に聞いてみたいと思う。

君が教えてくれたこと

L校　初等部　五年一組

金　太悟

夏休みに入って一ヶ月がたちました。いつもだったら日本のおじいちゃんとおばあちゃんの所に行って、日本の小学校に少し行った後、いとこのわかなちゃんとゆうき君といっしょに過ごしているはずです。でも今年はちがいます。新がたコロナウイルスの感せんが広まり、ぼく達の生活が変わってしまったからです。

ぼくが新がたコロナウイルスについて考えるようになったのは、二月のころでした。ぼくのクラスに中国から新しい転校生が来たからです。コロナウイルスは中国から発生したということを聞いていたので、ぼくは正直ちょっと心配して怖くなった気持ちを覚えています。「もしかしたら、この転校生はコロナにかかっているかもしれない。移ってしまったらどうしよう。」と思ったからです。

ある日、昼休みの時間に外でおにごっこをしている子供達がいました。その中に転校生も交じっていました。転校生がおにになってぼくはまた、モヤモヤした気持ちになりました。でも、このモヤモヤの気持ちは友達には言ってはいけない気がして、そのまま教室にもどりました。

家に帰ってもモヤモヤしていたので、夕ご飯を食べながらその日の出来事をお父さんとお母さんに話しました。

「どうしてそんなモヤモヤした気持ちになったと思う？」

と聞かれて、コロナウイルスが移ってしまうかもしれないと心配したこと、でもぼくがこんな風に感じていることを転校生が知ったらどう思うだろうと考えたことを話すと、今度は、

「転校生がタッチするとコロナが移るの？」

と聞かれました。

「うん…」

ぼくは自信がなかったけれど、そう答えました。お父さんとお母さんは、ぼくのこんな自信のなさそうな返事を聞いて、

「じゃあ、調べてみよう」。

と静かに言いました。

インターネットで調べてみたら、コロナウイルスは人から肩をたたかれるだけでは移らない事が分かり、ちょっとはずかしい気持ちになりました。そして、やっぱりこのモヤモヤの気持ちを友達に言わなくてよかったと思いました。

この出来事があって一つ分かったことは、物事はちゃんと調べて、正しい情報を得なければならないということです。ぼくは自分の想像だけで、転校生がまるでコロナウイルスをまき散らしているかのように考えてしまいました。そして、これはぼくだけではないかもしれません。

三月になって学校が休校になり、友達に会

えないまま、結局学校は終わってしまいました。卒業式もしないで、小学校を卒業しました。時々ふと、あの転校生の友達は何をしているだろうと考えます。そして、もしもまた会えたら、今度は一緒におにごっこができたらいいなと思います。

新型コロナウィルス

W校　初等部五年二組
中本　有誠

「コロナウィルス」と初めて聞いた時、ぼくはとても怖そうな病気だと思った。まず学校が休みになり、サッカーもなくなり、友達とも会えなくなり、おもしろくなかった。テレビでは、今まで見たことがないような防護服をつけた人がたくさん映っていてびっくりした。そして、毎日、死んでいく人の数がどん増えていって、怖くなった。よく行くセントラルパークに、たくさんのテントが作られていて、ハドソンリバーにアメリカ軍の大きな船が停まっているニュースにはびっくりした。ぼくはもうニュースを見るのがいやになった。

でもいやなことばかりではなかった。ぼくのお父さんも、ずっと家で仕事をして、お兄ちゃんも学校がオンライン授業になったので、家族でいっしょに過ごす時間が増えた。例え

ば、みんなで自転車をしたり、ジャズシントというバトミントンのようなものを買って、庭にネットも置いて、夕方になると毎日遊んだ。いつもだと、お兄ちゃんもぼくも、それぞれ習い事が忙しく、ほとんどいっしょに遊ぶ時間がないかもうれしかった。

でも恐れていたことが起きた。コロナウィルスが全然おさまらず、夏休みに日本に帰れなくなったのだ。ぼくは毎年一ヵ月以上、日本に帰り、おじいちゃんとおばあちゃんの家で過ごしている。お父さんとお母さんの実家は近いので、いつも両方の家に泊っている。いっしょに色々なことをするのが楽しみなのに、この夏はそれができなかった。いとこたちも、毎年いっしょに旅行に行くのに残念だ。みんなとはスカイプしているけれど、やっぱり会いたい。

ぼくが思うのは、オンラインは便利だけど、何かさびしい。学校も、先生と友達と同じ場所で勉強したいし、買い物もお店に行って買

いたいし、レストランにも行きたい。どこに行くにもマスクをして、人とはきょりをあけてという生活は早く終わってほしいと思う。

新型コロナウィルスのせいで、人と人とのふれあいが減ってしまい、人との関わり方が変わってしまった今の世界はさびしい。

もとにもどりたい

レエ校　初等部　四年一組
鹿島　花

ことしの三月からコロナウイルスでのロックダウンが初まりました。その時は、まだ友達と遊んでいたから、長くても一ケ月ぐらいで終わると思っていました。でも一ケ月たっても、ロックダウンは終わりませんでした。

ロックダウンで一番いやだったのは、友達に会えないことでした。だから、わたしのママは友達とビデオコールできるようにクブレットを買ってくれました。毎日友達とチャットしたりできるけど会って、お部屋

16×16

で遊んだり、いっしょにどこかへ行ったりしたいと思っています。

それから、毎年夏に日本に行くのに、今年は行けませんでした。日本だったら子ども達だけで公園に行ったり、いっしょに学校へ行ったりできるのにとすごい悲しかったです。日本だけではなくて、ほかの州にも遊びに行くこともできなくなりました。それで、カリフォニアに住む、わたしのいとこ達も、今年はニューヨークに遊に来られませんでした。

六月に入ってロックダウンが終わったころから、パパの仕事が急にいそがしくなりました。前は週末にパパと公園に行って遊んだり、レスト

ランへ食べに行ったりしてたけど、今は、もう週末に遊べる時間もありません。パパは、「またロックダウンになったら仕事がなくなるから、今できるだけがんばらないと。」と言って、朝からばんまで仕事をしています。ロックダウンにはまたならないかもしれないけれど、パパのお客さんがすくなくなるかもしれないという不安もあります。

ドラえもんの「もしもボックス」があったら、「もしもコロナウイルスのない世界にもどったら」と願いたいです。そしたら友達と会ってハグしたり、どこにでも旅行に行けるし、レストランでご飯を食べたり、

遠い所にいる家族に会えます。本当に一日も早く、コロナウイルスのない世界にもどることをねがいます。

16×16

ゴルフで月券つ

W校　初等部　四年一組

新木　カ一斗

ぼくは、五さいの時からゴルフを習い始めました。夏はトーナメントがあるので、それにそなえたくさん練習しています。ぼくは、毎日ドライビングレンジやゴルフコースに行き、だんだん上達しているように思います。ぼくの父もがんばってくれます。毎年、チームで練習するのですが、今年コロナのため、チームで練習することが少ないので、そんな時は、父が練習につれて行ってくれます。朝に行って、帰宅は夜八時です。

16×16

トーナメントの日がやってきて、ぼくは三位でした。次の週のトーナメントでも三位でした。メダルをもらってうれしかったのですが、次は、一位になれるようにがんばります。

どりょくをしていたら、くじける時もありますが、あきらめないで、つづけると、自分のゆめがかなうかくりつは高くなります。どりょくをしても、ゆめがかなうとはかぎりませんが、成功した人はかならずどりょくをしています。ゴルフの練習の時は、つらい時もありますが、ぼくは、まだあきらめないで、がんばっています。

ふしぎなおにわ

L工校　初等部　三年二組
梅原　雅美

わたしは、おにわでいろんなことができます。とくに、おにわの好きなところは、リラックスができることです。わたしは、草の上で手と足を大きくのばして横になるのが好きです。横になると風をかんじ、空には鳥がとんでいるのが見えます。木からりすが電線にとびのります。しぜんを見て、とても心がおちつきます。

おにわでは、いろんなしゅるいの虫や花々をかんさつすることができます。わたしがちょうちょをかんさ

つしていた時、花からみつをすっていました。そしたらみつを足のように見える口ですっていたことに気づきました。はちのかんさつでは顔にはなのようなとんがったものがありました。わたしはこのようなことが学べてうれしいです。

また、おにわはわたしにとってあそぶ場所でもあります。わたしがおにわでよくあそぶものは四つあります。一つ目は土をほってあそぶことです。二つ目は水あそびです。三つ目はおにごっこです。四つ目はサッカーです。おにわは、わたしにとって、自由になんでもできる公園です。

また、おにわはお母さんにはダン

スタジオになり、お父さんにはしごと場になり、うんどう場にもなります。おにわはなににでもへんしんする、ふしぎでとても楽しいところです。

16×16

うちゅうについて

W校　初等部　三年一組
安田　明里

わたしは、夜に星を見るのが大すきです。東京では町の光が明るかったので星をはっきり見ることができませんでした。ですが、アメリカに来てわたしが住むグリニッチは、空がとても広く、星がとてもきれいに見えます。

星空を見ていると、とてもきれいでドキドキします。それと同時に、夜空にすいこまれそうな気持ちになり、ふ安になります。

うちゅうは、わたしが想ぞうしているよりも、ずっとずっと広くて、

16×16

地球はうちゅうの中ではとても小さなそんざいです。うちゅうは今も大きくなっているし、星も新しく生まれたり、なくなったりしていると言われています。そう考えると、地球がなくなったとしても、うちゅうの長いれきしの中では、本当にさ細な出来事なのだと思います。

うちゅうには、まだ分からないことがたくさんありますが、一番のなぞはブラックホールです。ブラックホールはきょ大な星が死んだ時にできる天体です。星や光さえものみこんでしまいます。地球の近くにも大きなブラックホールがあると言われていて、いつか地球もすいこまれて

しまうのではないかと思うと、こわくて心配になります。

これから、うちゅうや星やブラックホールのことについて、もっときょう味を持って、調べてみたいと思います。

今年の夏休み

W校　初等部　三年三組
長谷　あがさ

わたしは、今年も夏休みに、日本へ行きました。なぜなら、おじいちゃんが、ガンの手じゅつをしたのでお見まいに行ったからです。今年は新がたコロナウィルスがはかっているので、いつもとちがうりょ行になりました。わたしは、ひこうきにのっている間、コロナになったらどうしょうかと、とても心ぱいでした。空港では、お店もほとんどしまっていて、あまり人がいませんでした。わたしは、こんなに人のいない空港は、はじめてで、びっくりしました

それから、ひこうきに乗って、日本までの十四時間は、ずっとマスクをしなければいけませんでした。あっという間に、日本に着きました。それからがたいへんでした。まず、ひこうきが着いてからすぐには、ひこうきから下りることができませんでした。しばらくしてから、アナウンスがあって、じゅん番におりました。それから、一つの部屋に集まって、PCRのけんさの話を聞きました。それは、このりょ行で、わたしが一番心配していたことでした。

「もし、コロナになっていたら、どうしよう。」とか、「コロナになって入いんになったら、病院に一人で行

かなければならなくなったら、どうしよう。などの心配事がずっと心の中にあったからです。

わたしは、ドキドキしながらけんさのれつにならびました。すると、わたしの前にならんでいた五才ぐらいの男の子が、いきなりゆかに、ひっくり返って大声でなきはじめたのです。まわりのみんなは、びっくりして、男の子を見ました。男の子のお母さんは、生まれたばかりの赤ちゃんをだっこして、とてもこまった様子でした。わたしは、心の中で、

「あの子もきっとこわがっているんだろうな。」と、思いました。男の子のことを考えているうちに、わたし

の番がきて、あっという間にけんさがおわりました。はなの中が少しくすぐったかったけど、おわってほっとしました。それから、家族がむかえに来てくれたので、家に帰ることができました。

次の日、メールがきて、わたしはいんせいでした。わたしは、とびあがるほどうれしかったです。

こうして、わたしの今年の夏休みがはじまりました。わたしは、いつもとちがうけいけんをすることができて、とても心にのこりました。

ぼくと漢字

六年二組　木交
リーアレクサンダー

ぼくは、漢字が大好きです。理由は二つあります。

一つ目は、色々なストロークで成りたっている所です。とめたり、はらったり、はねたりするのが面白いです。

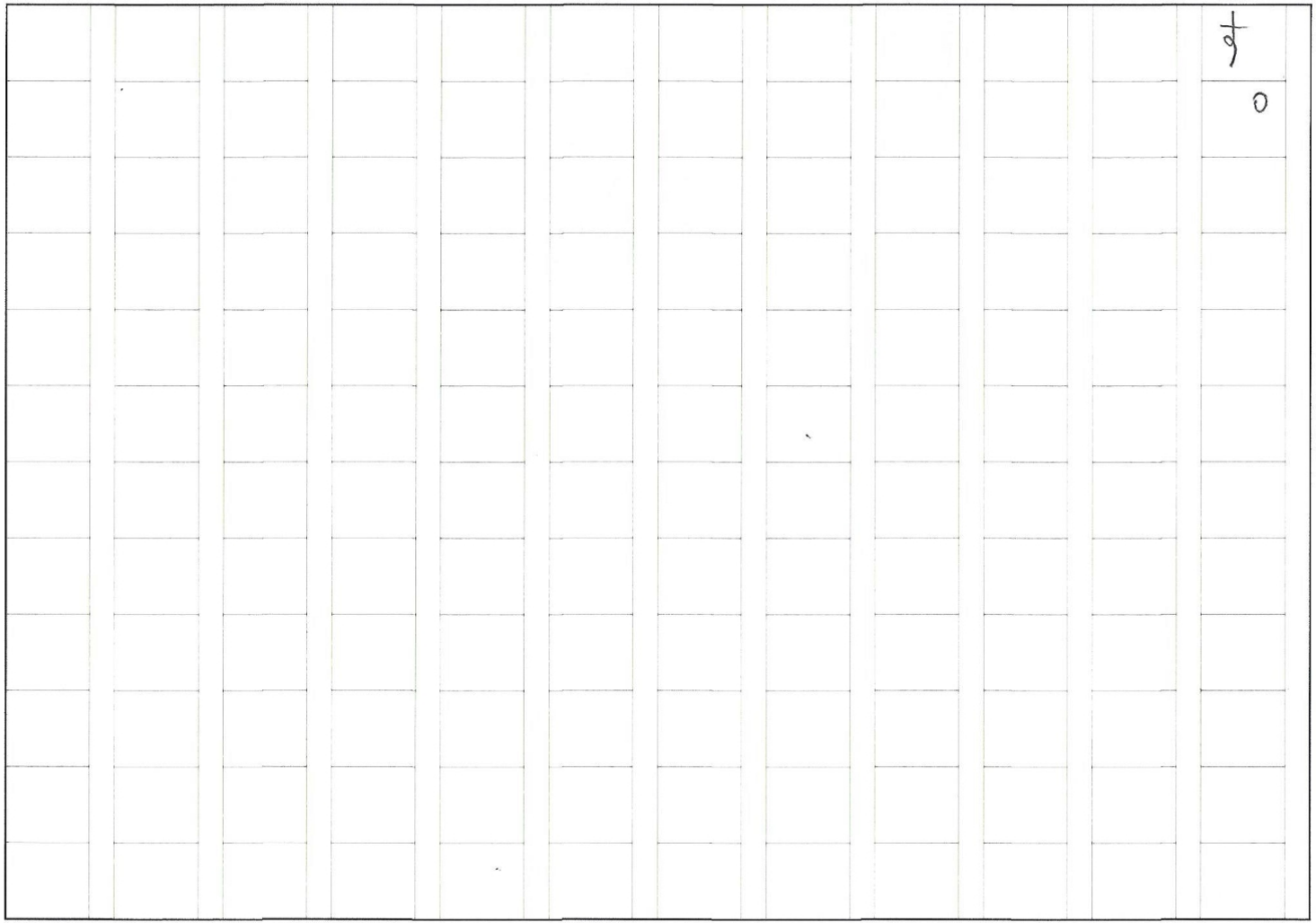
二つ目の理由は、形に意味があって、その言葉を絵

で表している所です。例えば人は人の様です。漢字の部分を使って、新しい漢字を作って遊ぶのも楽しいです。

ぼくは、今二年生ですが、二年生の漢字は、一年生で習ったものと比べると、すごく難しくなったと思います。例えば、画数の多い意味や頭が難しいです。しんにょうもなかなか格好良く書

けません。

一年生の漢字検定十級に受かったので、今は漢字検定九級の勉強中です。夏休みに、くもんと漢字検定3過去問題集を使って、毎日少しずつ学習中です。二年生は、二百四十文字覚えなくてはいけません。一年生の時の三倍です。でも受かりたいのでがんばっています。いつか一級に受かりたいです。



12×12

わたしのお父さん

W校　二年二組
石川桜

わたしのお父さんは、こきゅうきのおいしゃさんです。コロナがはやり、お父さんがはたらいてるNYのびょういんには、たくさんのかんじゃさんが来ました。お父さんは毎日朝から夜まで、はたらきいそがしそうでした。お父さんが家に帰

てくると、お母さんは、
「お父さんに近づいてはだめよ。」
とわたしと弟と妹に言ました。お父さんのようふくには、たくさんのウィルスがついているからしいです。でも妹は、まだ小いさいのでお父さんをさわることがあります。そのたびにお母さんは、妹の手をあらいに行きました。お母さんは、

「見えないウイルスだが気をつけて。」と言いました。わたしはウイルスが見えたらいいなと、思いました。お父さんはウイルスの中でこわくないのかしつもんしました。

「お父さんはこわいけれど、人をたすけるのがしごとだからね。」

とえがおで言いました。

お父さんは、かんじゃさ

んのために、こわくてもがんばってすごいと思いました。コロナのがんじゃさんのためにがんばるお父さんをおうえんしたいです。

わたしの妹

W校　二年三組

辻村　えれな

わたしには、四さいになったばかりの妹がいます。あかるくて、おもしろいので、家ぞくの中でムードメーカーです。

家ぞくで、ごはんをたべているとき、みんなの話を聞いて、とてもわらってくれます。ときどき、

「わうのが止まんないよお。」

と言って、わういつづけるので、わたしたちもわうってしまいます。

妹は、わたしのまねをよくします。同じようふ、おもちゃ、おかしなど、

「ねえねと同じのがいいよお。」

といつも言います。お母さんは、

「き」とねえねにあこがれているんだよ」。

と言っていました。まねばかりしてきて、たまにけんかをしてしまうけど、お母さんの話を聞いてかわいいなと思いました。

わたしが、友だちの家にとまりに行っていなかったとき、妹はさびしくてないてしまったそうです。そのことを聞いて、わたしは妹

をぎゅっとだきしめて、本当にかわいいと思いました。

わたしもそんな妹が大すきです。びよういんに行ったとき、気づいたら、妹のことばかり話していたようです。びようしのお姉さんが、

「本当に、妹さんのことがすきなんですね。」

と、お父さんに後で話していたそうです。わたしは、

それを聞いて、ちょっとはずかしかったです。

これからも、

「ねえね。ねえね。」

とずっと言ってほしいです。妹が生まれてきてくれて、よかったなと思います。ずっと大切にしていきたいです。

わたしのかわいいいぬたち

L工校一年二組
ラモス　エマ

わたしのいえには犬が二ひきいます。一ぴきはパグのギャスパーで、もう一ぴきはアメリカンコッカスパニエルのオットーです。

まいにちあさとよる、ママとわたしがおさんぽについていきます。二ひきともひとなつっこくてかわいいです。

す。

ギャスパーはナーさいで、ひるねがだいすきです。おとジャンプがとくいです。でも、なきごえはうるさいです。まるであざらしみたいに「オウー」となきます。オットーはナさいでボールあそびがだいすきです。オットーはくいしんぼうです。ときどきキッチンでたべものをぬすみます。ーど

オットーはとうもろこしをぬすみました。わたしのぶんはへったけど、オットーがおいしそうにたべたのでわたしはうれしかったです。

ある日、あめがふってかみなりがなりました。ギャスパーはかみなりがきらいなので、ブルブルふるえてキュンキュンなきはじめました。するとオットーがそばにすわって、ギャスパー

のかおをクンクンしはじめました。ギャスパーはオットーのおかげですこしおちつきました。ことばはないけど、二ひきがほんとうのきょうだいみたいになかがよくて、わたしはうれしかったです。

どこでもドアが
ほしいな
W校　一年二組
パテル杉浦ありあ

もうコロナせいかつにたえられない！行きたいところがあるのに行けません。夏には、おい年日本にかえって、お母さんのかぞくとすごします。今年、一年生になったので、ほんとうは、日本の小学校に行って、お

友だちを百人つくるはずでした。

また、ゆかたをきておまつりに行ったり、いとこといっしょにプールや公園に行ったりします。まい日楽しいことがいっぱいです。それもできなくなりました。

その中でも、一番さみしいのは、かぞくにあえないことです。おばあちゃんのいえにとまるので、いとこ

やおじさんやおばさんが、いつもきてくれます。おばあちゃんのいえには、はたけがあって、わたしの大好きなトマト、きゅうり、みかん、しそがたくさんあります。

わたしは、おばあちゃんとしそジュースをつくります。つくりかたは、しそをよくあらって、しんぶんの上にひろげて虫がいないか

チェックします。おばあちゃんは目がわるいので、わたしのでばんです。つぎに、にてからしぼります。さいごに、はちみつとにたらできあがり。おばあちゃんのしそジュースはうちゅうーです。今年もおまつだいをしたかったです。どこでもドアがあったら、すぐに行けるから、ドラえもん、わたしのいえにきて！

ピザのひ

Wこうーねん三くみ

いけだ　るあ

わたしは、ピザがだいすきです。なんでピザがだいすきかというと、チーズがびょーんとのびて、たべたらすごくおいしいからです。

うちは、きんようびはピザのひです。ピザのひは、ピザをかったりつくったりします。かうときは、おみ

12×12

せでうさぎのみみがついている。ピザをかいます。と、てもかわいいピザです。わたしは、いつもこのピザのひをたのしみにしています。

ピザをつくるときは、おかあさんといっしょにつくります。かたちはまるいピザをつくります。まずは、トマトケチャップをぬります。あとは、ズッキーニとうもろこしとハムとソー

12×12

ソーセージをのせて、さいごにだいすきなチーズをたっぷりかけます。あとは、オーブンにいれます。チーズがのびるようになったらできあがりです。

じぶんでつくったら、だいすきなとうもろこしとチーズがたっぷりですごくおいしいです。おかあさんもおとうさんも、わたしのつくったピザをすごくおいし

12×12

いといってくれるのでうれしいです。だから、わたしはピザのひがだいすきです。

12×12